李漢俊について

――中国共産党創建の思想的背景と『星期評論』による マルクス主義学説の紹介――

川尻文彦

はじめに

本稿では中国共産党創立メンバーの一人李漢俊（一八九〇～一九二七）を取り上げる。今日、上海で一大会址といわれる場所がある。一大会址とは文字通り、中国共産党第一回党大会跡地という意味で、一九二一年七月に中国共産党最初の党大会が行われたとされる記念すべき場所である。その場所が李漢俊の居所であったことはよく知られているが、家主の李漢俊について学問的に省みられることは多くなく、その生涯や思想は未解明の部分が多い。そこで本稿では先行研究を踏まえ、まずは李漢俊について伝記的にたどり思想的な背景や事実関係を確認することを目的としたい。そのことで思想史研究の側から中国共産党創建史の研究に寄与したいと考える。

李漢俊は一八九〇年四月二八日に湖北潜江県で生まれた。原名は李書詩、字は人傑、号は漢俊。兄の李書城は幼時より俊英の誉れが高く、十六歳で秀才に合格した。李書城は一九〇二年に日本に留学し、弘文学院で日本語を学んだ後、一九〇四年には振武学校（陸軍士官学校の予備学校）に入学した。学業のかたわら、湖北同郷会を組織し、『湖北学生界』を発行した。孫文の革命思想に共鳴し、一九〇五年の中国同盟会発足時には発起人の一人になった。一九〇八年、陸軍士官学校を卒業した。辛亥革命勃発後は戦役を指揮し、民国成立後は陸軍総長を務めた。李漢俊は日本

二

に留学していた兄李書城を頼って、一九〇四年に日本に渡り、明治大学付属の経緯学堂で日本語を学んだ後、暁星中学に進学した。暁星中学は一八八八年にフランスとアメリカから来日したカトリック・マリア会の五人の宣教師によって、築地に創立された。今日でもフランス語教育に特色のある幼稚園から高校に至る総合学園として定評がある。暁星学園には李定（後に十八歳の時に李人傑と改名）という名の中国人学生の学籍簿が残っていて、これが李漢俊のことである。[1] 一九一二年九月に名古屋の第八高等学校に入学し、一九一五年七月に東京帝国大学土木工学科に入学、一九一八年七月に卒業した。李漢俊も述べるように当時は高等学校に入るのが難関で、一部の人気学科を除き帝国大学へは基本的に全員入学であった。東京帝国大学在学時の成績は残っているが、それほど振るわなかった。その理由について、李漢俊自身が、入学早々の学期試験で下宿が火事に遭ったとか、数学はもともと得意だったが高等学校では暗記中心の勉強であったので大学に入ってからついていくのが難しくなった、等々後年に言い訳を述べている。[2] 李漢俊が東京帝国大学を卒業した一九一八年といえば、日本では河上肇『貧乏物語』が発行され、堺利彦や高畠素之らが『新社会』（一九一五年創刊）を舞台にマルクス主義の紹介記事を活発に発表しはじめた年である。翌一九一九年には『新社会』での翻訳連載をまとめて高畠素之訳『マルクス資本論解説』が発行されている。李漢俊の日本での読書経験については不明である。李漢俊は一九一八年末に十四年間の留学生活を終えて上海に戻った。上海に上陸した時の感慨を後に『新青年』（第九巻第一号、一九二一年五月一日）に「跑到内地才睜開了眼睛麼？［内地をめぐってやっと目を開かせられたのか？］」と題して「臭気が立ちこめ、灰褐色のぼろ服が風に揺れる天空の下、糞尿が入りまじりできものを全身にまとったような黒い大地で、ぼろ着をまとい黄色い皮膚の痩せこけた薄汚い群衆が集まっていて、騒々しく道を行く者や、陽光の下で衣服を脱いで虱をとる者や、室内で布きれを片付ける者や、汚れた布団のなかで力なく呻吟する者がいる。[3]」と述べ、まさに「地獄」の風景であるという。高杉晋作、芥川龍之介など日本人渡航者が描く汚い臭い上海と共通であり、私たちには既視感がある。上海ではフランス租界の霞飛路漁陽里（今の淮海中路五六七弄）にあった兄李漢城の居所を頼った。向かいには湖北の善後公会があり、湖北出身者の集会

所のような趣きがあった。帰国直後の一九一九～二二年に李漢俊は百編あまりのマルクス主義関係の論著を著述・翻訳した。おそらく帰国時に社会主義に関する多くの日本語書籍を携えており、帰国後も日本語書籍を取り寄せたりしていたのであろう。『星期評論』、『民国日報』副刊の『覚悟』、『建設』、『救国日報』、『民国日報』などが主な発表媒体であるが、『星期評論』を舞台にした活躍が目立つ。李漢俊が初めて発表した論説「怎麼様進化？［どのような進化か？］」も『星期評論』（第十一号、一九一九年八月一七日）に載ったものである。李漢俊と『星期評論』の縁は深い。そこで『星期評論』がどのような雑誌であったのか、以下で検討する。

『星期評論』の創刊

一九一九年六月八日、孫文の側近であった戴季陶、沈玄盧（一八八三～一九二八）、孫棣三らが北京の『毎周評論』を模倣して『星期評論』を上海で刊行した。発刊の趣旨には「五四、六五の二大運動の精神を発揮し、五四、六五の二大運動を継承する人類運動を創造する。[4]」とあり、また「星期評論の任務は哲学、文芸、社会、政治に対する自由な批判である。[5]」とある。新文化運動の精神に沿ったもので、五四新文化運動の継承がうたわれる。発刊詞には「現在の世界は誰の世界であるか？　私は単刀直入に「私の世界」であると答える。また尋ねる、今の国家は誰の国家であるか？　私はこちらも単刀直入に「私の国家」であると答える。また私は尋ねる、現在の世界の大勢はどうであるか？　世界の思潮はどうであるか？　私たちの国家は現在の世界の大勢においてどうであるか？　現在の世界の思潮においてどうであるか？　私は私たちの思想を用いて『星期評論』を創作しなくてはならない。[6]」とある。「世界の大勢」や「世界の思潮」への言及がある。新文化を「世界の大勢」や「世界の思潮」の中で捉えようとしている姿勢が見出せる。

戴季陶は「ある時代の革命は、その実際の現れは必ず革命の要求を先駆けとしている。革命の要求はつねに思想の

四

革命によって現れる。それゆえどの国、どの時代であっても、一つの大革命の前には必ず新旧の思想戦の時代がある。[7]」と述べる。戴季陶は孫文の側近であったので、孫文の「革命理論」に基づいた「思想革命」を目指す目的であったとも見ることができる。[8]『星期評論』は新文化運動に触発され、新文化および社会主義を宣伝するいわゆる国民党系の雑誌として始まった。戴季陶（一八九一～一九四九）は原名伝賢、学名良弼、字は選堂、筆名は天仇等。祖籍は浙江呉興、四川広漢の生まれ。十四歳で日本留学、中国同盟会に参加し孫文と面識を得、その後忠実な側近となった。一九〇九年に中国に帰国し、江蘇自治研究所主任教官として憲法学や法学の課程を担当した。一九一〇年から一九二〇年まで『中外日報』『天鐸報』『光華日報』『民権報』『民国』『星期評論』『建設』等の新聞雑誌の編集に携わった。『星期評論』でいえば、一九一九年五月には、戴季陶は上海のフランス租界愛多亜路（今の延安東路）新民里五号に編集部を置いた。『星期評論』創刊初期は孫文の思想を宣伝していたが、発行二か月後に李漢俊が加入するとマルクス主義宣伝を主にするようになった。一九二〇年二月には編集部が上海愛多亜路新民里五号からフランス租界の白爾路三益里十七号（今の自忠路一六三弄十七号）に引っ越しした。ここは李漢俊と李書城の居所であり、『星期評論』が李漢俊を中心とした発行体制に移行したことを示す。『星期評論』は上海『民国日報』副刊として毎週一号発行され、毎週日曜日発売（第三十一号、第四十八号は例外）。一九一九年六月八日から一九二〇年六月六日まで五三号発行し、それに加え一九一九年十月十日には「双十節紀念号」増刊も発行した。『星期評論』はマルクス主義の中国における初期伝播において重要な位置を占める雑誌である。わずか一年間の刊行期間で中国においてまだ馴染みの薄かったマルクスやエンゲルスの学説や唯物史観、労働価値説、剰余価値学説などマルクス主義の重要学説を紹介した。十月革命の影響によってレーニンやボルシェヴィキなどの単語は中国の知識人によく知られていたが、社会主義にかかわるマルクス主義、レーニン主義、ロシア革命などの概念について明確な理解があったとはいえない。今日の私たちは社会主義と言えば、エンゲルスのいう「空想的な社会主義」に対する「科学的な社会主義」のイメージを持っている。しかし、当時の中国において社会主義はマルクス主義に比べかなり広い概念として使われていた。孫

文は、一九〇六年に社会主義は「流派がきわめて多く」（「在東京『民報』創刊周年慶祝大会的演説」一九〇六年十二月二日）、全部で五十七種あり、結局どれが正しいものなのか分からない（「三民主義・民生主義」一九二四年八月三日）と述べている。陳独秀も「社会主義は理想が非常に高く、学派も非常に複雑である」（「答褚葆衡（社会主義）」『新青年』第二巻第五号、一九一七年一月一日）と言う。鄭大華によれば五四以降の新思潮の中で一九一九年後半にはわずか半年の間に中国全土で四百種を超える社会主義思潮を研究する新聞・雑誌が発行されたという。[9] 周仏海も社会主義を談じた雑誌はとても多く、社会主義を宣伝するにせよ、反対するにせよ、「近来の思想界が社会主義というものに対して熱心に研究に向かっていることが分かる。[10]」という。一説には一九一八～二二年の五年あまりの間に社会主義について紹介を試みた雑誌や新聞は二二〇種あまりにも達し、同時期に発行された雑誌や新聞のおよそ八〇パーセントに達するという。[11]『星期評論』は社会主義を宣伝し、それはマルクス・エンゲルスの学説のみならず、トルストイ、クロポトキン、さらに民生主義、ギルド社会主義、工読互助主義[12]等多岐にわたる。一九一九年のデューイの中国訪問が与えた思想的な影響も無視できない（上海でも講演を行った）。『星期評論』雑誌においてマルクス主義関連の記事は五十編前後、おおまかにいって全体の九分の一にすぎないとの指摘がある。[13]

マルクス主義思想の伝播にともない、知識人と都市の労働者との連合の模索といった状況が出現した。[14] 一九一九年当時の上海の状況はどうであったのか？　一九一九年五月の五四運動はすぐに上海に波及した。北京での学生運動から上海への三罷運動へと発展していく。社会主義思想への関心の高まりとともに、労働運動に取り込もうとする知識人が増えていった。[15]『民国日報』副刊「覚悟」一九一九年九月号には、大悲・漢俊［李漢俊］共訳の佐野学「労働運動之指導的倫理」（原著は「労働運動の指導倫理」『解放』大正八年八月号）と周仏海訳の久留弘三『労工運動』（原著は『労働運動』社会問題叢書第一編、福永書店、大正八年七月十八日）が掲載されている。これ以外にも、『時報』副刊「実業週刊」の紙面の半分を十二月以降「労工之声」として発行し、内外の労働運動のニュースを掲載している。一九一九年九月に創刊された研究系の雑誌『解放与改造』にも労働組合論やサンディカリズムの紹介のほか、

六

張東蓀による包工制批判の論文「頭目制度与包辦制度的打破」（『解放与改造』第一巻第五号、十一月一日）が掲載されている。『星期評論』は六月の三罷運動の最中に創刊されている。戴季陶は六月以降、マルクス主義や労働問題に関心を寄せ、『星期評論』に矢継ぎ早に論説を発表している。『星期評論』の社会影響力によって戴季陶、沈玄盧なども五四時期の知識界のスターとなった。

『星期評論』は、威廉・里布列希（戴季陶訳、注）「馬克思伝」（第三十一号、一九二〇年一月三日）や「唯物史観的新解釈」（林云陔撰稿）を掲載したことで今日の研究者によって特筆される。ただし『星期評論』におけるマルクスやエンゲルスへの言及は全論説中で六・五パーセント程度であり、実はさほど目立つものではない[16]。マルクスやエンゲルスに言及したのは、戴季陶、T・T・S、林云陔、李漢俊などである。その中でも戴季陶はマルクスに言及することがもっとも多く、「対付〝布爾色爾維克〟的方法」（第三号、一九一九年六月二二日）、「徳国社会民主党的綱領」（第十号、一九一九年八月十日）、「〝世界的時代精神〟与〝民族的適応〟」（第十七号、一九一九年九月二八日）、「英国的労働組合」（双十紀年号、一九一九年十月十日）、「意大利的〝赤色化〟与其反動」（第二十八号、一九一九年十二月十四日）、「中国労動問題的現状」（第三五号、一九二〇年二月一日）、「徳国革命的因果」（第四三号、一九二〇年三月二一日）、「関於労動問題的雑感（一）」（第四八号、一九二〇年五月一日）、「『新青年』的〝労動節紀念号〟」（第四九号、一九二〇年五月九日）等の論文や翻訳でマルクスに言及している。沈玄盧、李漢俊に比べて、戴季陶のマルクス主義宣伝における功績は圧倒的であった。『星期評論』を舞台にして、戴季陶や李漢俊等日本に留学しマルクス主義に接触した者がマルクス主義の初期の伝播にきわめて重要な役割を果たしたことが見て取れる。この時期、河上肇、高畠素之、山川均など日本のマルクス主義経済学関連文献がこぞって中国語に翻訳されたのである[17]。

戴季陶とマルクス主義

戴季陶は当時日本語の資料を多用して著述活動を行い、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『上海日日新聞』を参照していた。このほかにも同時期に日本で発行されていた社会主義系雑誌『新社会』『批評』『社会主義研究』『デモクラシイ』『改造』『東洋経済新報』『経済論争』からの引用が『星期評論』には散見される。戴季陶は「世界的時代精神与民族的適応」（『星期評論』第十七号、一九一九年九月一八日）の中で「マルクスは社会主義の集大成者であり、社会主義科学的根拠の創造者である」とする。そのうえで、マルクス主義は各国の国情と結合すべきであるという。「マルクス主義は世界的なものであって国家的なものではない。」戴季陶の考えでは、マルクス主義は世界各国の発展、変化において「マルクス主義の分化」とよびならわすことができる。その分化の原因は、各民族歴史の精神と現代の状況が異なるためである、と。そして「社会主義というこの主義は、私のみるところけっして一つの厳格な主義なのではなく、ただ一つの世界的な時代精神にすぎない。この一つの時代精神は普遍的に全世界を照らしている。全世界の民族は、各々その歴史的な精神を持ち、各々現在の境遇を有し、そこで各々理想的な世界を持つ。この各民族特有の性質は、世界の時代精神が覆っている中で、すべて各々自由に発展し、世界の時代精神に適合していく。その方向性は世界の協同の進化の中にあるものの、その用いる方法――つまり進行の道筋――は一種の異なった形体をとることになる。ダリアはヨーロッパで植えればヨーロッパの色彩を現し、アジアで植えればアジアの色彩を現すようなものである。[18]」という。この「マルクス主義の分化」という考えは、堺利彦が『社会主義研究』に掲載した「マルクス主義の分化」から発想を得たとする説もある。[19] 社会主義の代表としてマルクス主義を評価しつつ、マルクス主義を「世界的な時代精神」として広く捉え、「協同の進化」を経て各国の事情にそった形での実現を目指すとしている。戴季陶は一九二〇年五月の『星期評論』（メーデー特集号）に二本の論文を寄せ、マルクス主義への共感を吐露している。社会主義については、マルクス経済学を根幹にした「科学的社会主義」をもっと研究すべきである。ロシ

アのボルシェビキによる建設については、政治組織面や経済組織面において頼りになる模範であり、徹底的に研究しなくてはならない、と述べる。[20] また、「文化運動与労働運動」では、「プロレタリア新文化」の概念を提示した。唯物史観を活用して労働運動と文化運動の因果関係を説明し、文化運動によってプロレタリア階級が豊かな文化を享受できるようになることを目的とする、としている。[21]

さてカウツキーの『マルクス資本論解説』の翻訳（日本語訳からの重訳）は戴季陶のマルクス主義の紹介者としての名声を一躍高めた。カウツキー『資本論解説』の原本は、Kautsky, *Karl Marx's Öekomomishe Lehren*『カール・マルクスの経済学説』（一八八六年出版）で、すでに国際的な定評のあるものである。[22] 主に『資本論』第一巻を解説したもので、剰余価値と利潤に関する章のみ第三巻の一部で言及されている。高畠素之による連載は、『新社会』一九一七年二月から一九一九年四月まで二三回にわたった。高畠はこの時期、ロシア革命の分析に追われ、山川均との論争も平行して行っていた。訳者付記の冒頭で高畠素之は「著者カウツキイはマルクス直系の社会主義学者として現今斯界の最高権威と目されてゐる。」と述べている。一九一九年四月の段階で大半を訳了していたが、高畠素之が『新社会』から離脱したため翻訳連載を中断し、一九一九年五月十六日付けで売文社出版部より単行本として自費出版した。一九二二年までにこの本は一万三五〇〇部を発行し大ベストセラーとなった。[23] 高畠は「著述成金」となったのである。[24] しかし、一九二三年の震災で紙型がすべて焼失し絶版となったのを機に改訳し、その後も重版をかさねた。一九二七年には改造社版が発行されて、一円二〇銭の小型廉価版ということもあって数万部が売れたとされる。高畠は一九二四年の改訂版の訳者序で、本書によって資本論の本質をかなり正確に読むことが出来たと述べ、「名著の解説書」として「完璧の域」に達していると絶賛した。高畠素之は一九二四年に『資本論』全巻の日本語訳をはじめて完成させたことでも著名である。当時の日本の知識青年たちは高畠素之訳『解説』から入門し、高畠素之訳『資本論』へと進んでいくことが期待された。一九二〇年一月、戴季陶は堺利彦に手紙を送り、社会主義関係の文献や雑誌の寄贈を依頼したところ、実際に高畠素之編訳のカウツキー『マルクス資本論解説』が堺利彦から戴季陶に送ら

れた。[25] なお同時に日本語訳『共産党宣言』も戴季陶に贈られ、陳望道に転送された。陳望道は一九二〇年四月に故郷の浙江義烏に戻ってすぐに翻訳作業に着手し、翻訳作業の終了時には『星期評論』は停刊していたため、中国語訳『共産党宣言』は李漢俊や陳独秀らを通じて「社会主義叢書」の一冊として八月に出版された。戴季陶と朱執信はカウツキー『マルクス資本論解説』を中国語訳し、「馬克斯資本論解説」と「商品生産的性質」と題して、一九一九年一一月から『建設』雑誌（第一巻第四～六号、第二巻二・三・五号、第三巻第一号）と『民国日報』副刊「覚悟」（一九一九年十一月二～七日）にそれぞれ連載した。『資本論』第三篇第四章までの内容である。これは中国における最初のまとまった形での『資本論』の紹介解説である。その後、一九二七年に民智書局より胡漢民が補訳した残りの三章を合わせて単行本として発行された（戴季陶「『資本論解説』序」民智書局、一九二七年）。さらに戴季陶はヴィルヘルム・リープクネヒトの「マルクス伝」も翻訳し、威廉・里布列希（Wilhelm Liebknecht）著「馬克斯伝」として『星期評論』第三十一号（一九二〇年新年号）に掲載した（あわせて「資本論用語釈義」「社会主義綱要」「労働問題研究」なども掲載）。戴季陶は志津野又郎訳（『社会主義研究』一九〇六年第一号）を主とし、室伏高信訳（『批評』一九一九年掲載）を参考にして重訳したとする説もあるが、[26] 後者については誤りである。『社会主義研究』は堺利彦編集発行による日本最初の社会主義雑誌（月刊）で、第一号は一九〇六年三月十五日に、第五号は一九〇六年八月一日付で発行され結果的に最終号になった。『平民新聞』以来の盟友幸徳秋水は一九〇五年に渡米して不在で、堺利彦の自宅に編集部があった。『社会主義研究』はほとんどが外国文献の翻訳や紹介にあてられ、なかでも第一号巻頭の『共産党宣言』と第四号の『科学的社会主義』のマルクス主義二大古典の翻訳は学術史上の意義がきわめて大きい。志津野又郎（しづの・またろう　？～一九四二）は堺利彦の同郷のいとこで、英語に堪能で、堺の秘書役をつとめ『社会主義研究』で翻訳を出したりしていた。後者の室伏高信（むろふせ・こうしん　一八九二～一九七〇）は著名な評論家で『批評』にも多く寄稿しているが、[27] 戴季陶が参照したのは、ウキリアム・リープクネヒト「マルクスの生涯」（『批評』第六号、大正八年八月一日）と「マルクスの生涯（二）」（『批評』第七号、大正八年九月一日）であ

る。翻訳者の木蘇生とは木蘇穀（きそ・こく　一八九三〜?）のことで大正昭和期の評論家・翻訳家である。

李漢俊によるマルクス主義紹介の雑誌へ

一九一九年六月の創刊から一九二〇年二月の編集部移転まで、『星期評論』の論説は戴季陶と沈玄盧の手によるものが多かった。戴季陶と沈玄盧が『星期評論』の編集から退いた後は、李漢俊が『星期評論』の主編となり、一九二〇年二月に『星期評論』編集部は李漢俊の自宅（白爾路三益里十七号）に移り、李漢俊は邵力子、陳望道らと編集作業に当たった。楊之華は一九五六年の回想の中で李漢俊が『星期評論』における「思想領導中心」であったと述べている。[28] マルクス主義理論の宣伝という観点から言えば、編集部移転以降、『星期評論』の紙面の変化ははっきりしている。ソビエト・ロシアの社会制度やマルクス主義学説に対する好意的な紹介が目を引く。

李漢俊は帰国後最初の著作「怎麼様進化」を『星期評論』（第十一号、一九一九年八月十七日）で発表し、次のように述べる。[29] 大資本家が生産手段や交易市場を独占することによって、生産量は需要に適した程度ではなく資本家の富を膨張させるためになる。労働力を浪費する結果、生産過多な大恐慌を引き起こすことになる。この資本独占の勢力が、拡大し始め、死に物狂いで市場を独占するようになる、と。労働者たちは機械同様の「道具」となり、弱小国家の人民は貧困に陥り、経済危機と世界大戦を発生させる。李漢俊の考えでは、人類がこの「奇形の社会」を変え、幸福な安定した方向へと持っていこうとするならば、機械の所有権を一般の機械を運用する人たちにもたらさなくてはならない、と。李漢俊は一九一九年十月六日の董必武宛て書簡でも、マルクスの唯物史観を運用して、人類の物質世界の発展の歴史から、社会改造の根本的な出路を物質改造の世界において解説する。精神作用は重要であるが、それは物質世界の反映であり、社会発展に影響している。中国社会の長期停滞の原因は、思想解放がないことであり、伝統を疑わず、支配者がもうけた檻を突破できないためにある、と。[30] 以上から、李漢俊は一九一九年の前半の段階

で、マルクス主義をすでに受け入れていたことが分かる。さらに一九一九年九月五、六、七日に山川菊栄「世界思潮之方向」（『解放』一九一九年第八号、大鐙閣、後に『女の立場から』三田書房、一九一九年に収録）を上海『民国日報』副刊『覚悟』で詹大悲と共訳し、連載した。山川菊栄は「革命とは政治、社会、経済の諸方面に亘つて旧来の思想、道徳、制度、組織の一切を根底から覆し、社会を全然新たなる基礎の上に建て直そうとする運動である。」と述べたうえで、「無産階級自ら、偉大なる理想と偉大なる実行力を兼ね備へて居る」と指摘した。李漢俊は末尾に付言を書き、無産階級の一分子として「人々は私たちを民党あるいは革命党と呼ぶ」といった。李漢俊は少なくとも革命の担い手として「民党」や「革命党」を想定したことが分かる。田子渝は「民党」や「革命党」が無産階級政党であることは明白であるとし、無産階級政党を創建する意図を李漢俊が持っていたことを示すものとして高く評価する。[31]

李漢俊は早くから日本や朝鮮の社会主義者たちと関係を持ち、コミンテルンとの接触にもつながった。[32] 一九一九年十一月には韓人社会党（一九一八年、ハバロフスクで結成）の朴鎮俊（朝鮮系ロシア人）がコミンテルンの派遣で上海に来た。[33] 当時の上海はロ・日・朝の社会主義者たちの活動のアジトと言ってもよかった。一九二〇年二月には上海の永安飯店で朝鮮人李光洙やロシア人リゼロビッチ（J. Lizerovitch）と協議し、コミンテルンの資金提供により『労働者』（The Worker）の出版が決まった。リゼロビッチはすでに『上海俄文生活報』（一九一九年刊行）を発行しており、同報はボルシェビキの極東における重要な宣伝雑誌であった。李漢俊はリゼロビッチとの関係を深め、一九二〇年春から『星期評論』にはリゼロビッチが提供したイギリスやアメリカの社会主義刊行物の文章が載るようになる。『星期評論』（第四六号、一九二〇年四月一九日）の李漢俊訳「強盗階級――蕭伯納賛美波爾色維克」は、蕭伯納（George Bernard Shaw バーナードショー）が一九二〇年一月二十九日と二月六日に Kingsway Hall で行った講演 Socialism and the Labour Party を抄録したものである。英語から直接中国語訳されたとみられる。続けて『星期評論』（一九二〇年五月一日、メーデー紀念号）に李漢俊「強盗階級底成立」、李漢俊訳で J. Lizerovitch『五一』と E. Maharam『人力車夫』が掲載された。「強盗階級底成立」では「社会上あらゆる不平、あらゆる罪悪、あらゆる痛苦

は、すべてこの強盗階級の存在に由来しないものはない。……彼［バーナードショー］のいう強盗とは、国家、法律、道徳を堡塁とし、知識を武器とし、金銭を弾丸とし、青天白日のもと、衆人環視の中で、平民の財産を奪い、平民の血と汗を搾取する資本家である。[34]」とし、資本家が強盗であり、資本家階級が強盗階級である、と。『星期評論』はマルクス主義的な傾向を鮮明にし、コミンテルンによって重視されるようになった。イギリス情報機関の報告（FOイギリス外交档案四〇五／二二八、一五七号文件附件一九二〇年四月七日）では李漢俊は「中国のボルシェビキ」と称され、公安の調査対象になっている。イギリスは中国におけるボルシェビキ勢力の拡大を警戒していたのである。

張東蓀（一八八六～一九七三）のギルド社会主義（Guild Socialism）の提唱は、一九一九年末に始まる。張東蓀は「我們為什麼要講社会主義」（『解放与改造』一九一九年十二月）の中で、ギルド社会主義を提唱した。中国において資本主義を発展させるためには協社の形式で労資の互助を行い、ロシア式の社会主義を中国で実行することに反対した。張東蓀はさらに一九二〇年五月に「為促進工界自覚者進一言」（一九二〇年五月七日）の中で、イギリス式の工行社会主義を提唱し、ロシアのプロレタリア専政を批判した。李漢俊はいち早く「渾朴的社会主義者底特別的労動意見」（『星期評論』第五十号、一九二〇年五月十六日）、「社会主義与自由批評」（『民国日報』副刊『覚悟』五月二十一日）、「自由批評与社会問題」（『民国日報』副刊『覚悟』五月三十日）等を発表し、張東蓀のギルド社会主義を批判した。[35]張東蓀のギルド社会主義については多くの要素を含むが、[36]本稿では李漢俊による張東蓀批判の論理に限定して述べる。一九二〇年五月の段階で李漢俊自身のマルクス主義の立場が固まっており、議論は単一である。李漢俊が言うには、張東蓀のいうギルド社会主義は「目の見えない人が、手元に杖がありながらつかむことができず、ただ一つの方向に向かって、前に道があるのかないのかも分からず、山だろうと川だろうと、ただ前に向かって歩いているだけである。[37]」と。張東蓀のいう社会主義は具体的な内容に乏しく、資本主義の道に向かうことを覆い隠すものである。張東蓀は中国には労働者もなく、資本家もおらず、必要なのは労働運動ではなく実業を発展させることである、と。李漢俊によれば、中国の資本主義階級は比較的弱いとはいえ、外国の資産階級と同じであり、ともに強盗階級で

ある。労働者階級と資本家階級は根本的に対立するものであって、労資互助を唱えたところで、労働者階級が資本家に圧迫されるのを助長するだけである、と。李漢俊が「労動者与〝国際運動〟」（『星期評論』第五十一、五十二、五十三号、一九二〇年五月～六月、三回連載）を発表したのは、張東蓀が「新国際運動」に反対を表明したためである。「新国際運動」とは国際共産主義運動のことであり、国際共産主義運動については、これ以前にも「万国社会党大会略史」（『民報』）、「万国社会党会史」（『社会世界』）、李大釗「欧州社会党之平和運動」、李達「戦前欧洲社会党運動的情形」があったが、第一、第二、第三インターをまとまった形で紹介したのは、李漢俊の「労動者与〝国際運動〟」がはじめてである。二万字をこえる大作の中で、一八四八年の革命後、ヨーロッパにおける急速な資本主義の発展から語りはじめ、第一インター（一八六四年）、第二インター（一八八九年）の理想とその失敗の歴史が語られ、第一次世界大戦による分裂を経験し、ロシア革命、ボルシェビキの政権掌握を経て、全世界の無産階級の団結のために一九一九年三月に第三インター（コミンテルン）が結成されたと概説する（依拠した文献があるはずだが、不明）。無産階級革命事業を成し遂げるためにマルクス主義の道に沿って歩んで行くことが説かれている。その後、一九二〇年六月に『星期評論』は停刊を命じられると、李漢俊は『星期評論』編集部（李漢俊自宅）を「社会経済叢書」編集部に変え、マルクス主義関係書籍の出版に力を入れた。

李漢俊はマルクス主義に対する研究を積み重ね、諸論説を発表していく。李漢俊は『馬格斯資本論入門』という『資本論』の解説本を日本語から重訳して出版している。李漢俊は「『馬格斯資本論入門』序」（一九二〇年九月、社会主義研究社）で、同書の由来と狙いについて以下のように述べる。[38] 李漢俊が言うには、『馬格斯資本論入門』は遠藤無水（一八八一～一九六二 本名遠藤友四郎）が翻訳した『通俗マルクス資本論』（文泉堂、一九一九年）を重訳したものである。原書は *Shop Talks on Economics* であり、『万国社会党評論』の共同編集者であった Mary E. Marcy（一八七七～一九二二）の著書である。Mary E. Marcy はマルクス主義者で、アメリカの左翼系雑誌『国際社会主義評論』（*International Socialist Review* 李漢俊は『万国社会党評論』と訳す）の主編を務めた。『通俗マルクス資本

論』(*Shop Talks on Economics*) はマルクス経済学説の骨子である商品、価値、価格、剰余価値および資本と労働の関係を解説している。マルクス学説を平易に簡潔に解説したものとしては西洋で第一のものであると李漢俊は言う。マルクス社会主義に通じようとしたら、マルクス社会主義の三経典――つまりマルクスとエンゲルスの共著『共産党宣言』*Communist Manifesto*、エンゲルスの『空想および科学の社会主義』*Socialism: Utopian and Scientific*、マルクスの大著『資本論』*Das Capital*――のうちの一つ『資本論』を精読しなくてはならない。『資本論』は非常に難解であるため、カウツキーは一冊の解説本 *Karl Marx's Ökonomische Lehren*［『マルクス資本論解説』］を著した。この *Karl Marx's Ökonomische Lehren* は、経済学の知識のない者にとっては理解が難しい。この『馬格斯資本論入門』は『資本論』の解説本の解説本である、と。さらに李漢俊が言うには、中国の知識界の現状では『資本論』の中国語訳の登場はまだ難しいだろう。しかしカウツキーの解説本はすでに戴季陶が『馬克斯資本論解説』の名で『建設』雑誌（第一巻第四号～）に全体の五分の四を翻訳連載しているので、間もなく単行本が出るだろう。読者は『馬克斯資本論解説』を読んだ後で『資本論』を読む、あるいは直接『資本論』を読むにせよ、読者はまずこの『馬格斯資本論入門』を読まなくてはならないだろう。この『馬格斯資本論入門』の原書名からすれば『経済漫談』とすべきだが、その内容から考えて『馬格斯資本論入門』とした。内容は平易だが、抽象的なところもあり、経済学の知識がないと分からないところもある。そこで私は読者が分かりづらいと思われるところに注釈を入れた。読者は本書を読んだ後で、マルクスの『価値、価格及利潤』(*Value, Price and Profit*) を読むのがよい。これは一八六五年六月にマルクスが万国労働者同盟で行った講演であり、マルクス経済学説の全体が含まれている。読者は本書を読めば、『馬格斯資本論入門』の中の観念が明瞭になってきて、『資本論』を読む時の困難が減るであろう。私は本書『価値、価格及利潤』の翻訳に着手していて、まもなく出版できるであろう、と。[39] 以上、李漢俊の「解説」を詳しくたどってみた。しかし、実は李漢俊の「解説」は、遠藤無水『通俗マルクス資本論』の「はしがき」を遠藤無水の名を記さずにそのまま中国語訳している。李漢俊が述べる『馬格斯資本論入門』（遠藤無水、李漢俊）→『馬克

斯資本論解説』（高畠素之、戴季陶）→『資本論』（マルクス）への段階学習の勧めも遠藤無水がそのまま書いているものである。李漢俊のマルクス主義学習が真面目な「翻訳学問」そのものであることを如実に示している。なお遠藤無水は高畠素之と同志社の同学で親交が厚く行動を共にし、国家社会主義を奉じ『東北評論』『国家社会主義』等の雑誌を発行し、堺利彦の売文社と袂を分かった後は文筆・翻訳で生計を立てた[40]（高畠、遠藤の『資本論』解説本はともに一九一九年刊）。

上海での陳独秀と中国共産党早期組織

中国共産党結成に向けて上海で陳独秀を中心に動きがあった。史料的制約もあり不明点も多いが、おおむね以下のような共通了解が研究者間で存在する[41]。ロシア十月革命後、『新青年』は「庶民的勝利」や「Bolshevism 的勝利」といったロシア革命を称賛する論説を掲載した。『新青年』第六巻第五号（一九一九年五月）は「馬克思主義研究号」と題して李大釗の「我的馬克思主義観」を掲載した。これは中国の知識人がはじめてマルクス主義を系統的に紹介したものである。一九一八年末にはすでに李大釗は北京大学内にマルクス学説研究会を組織しており、マルクス主義への理解を深めつつあった。陳独秀が出獄後、一九二〇年二月に上海を訪れる[42]。当時の上海には、陳独秀・『新青年』や北京大学の関係者、国民党の『民国日報』主筆の邵力子、胡漢民ら、孫文も当時上海にいた。梁啓超系の『時事新報』主筆の張東蓀ら、それに『星期評論』同人たちがおり、各々社会主義に関心をもっていた[43]。陳独秀は戴季陶ら『星期評論』同人と関係を深めるようになる。陳独秀と戴季陶はわずか百メートルの距離に住んでいた。陳独秀は霞飛路に面した漁陽里六号、戴季陶は漁陽里二号である。張国燾の回想によれば、陳独秀と戴季陶は「相当親しかった[44]」。

一九一九年三月にはコミンテルンがモスクワで結成された。一九二〇年夏のコミンテルン第二回大会で「民族問題

と植民地問題に関するテーゼ」を採択した。ヴォイチンスキー（G. N. Voitrngsky　一八九三～一九五三）は在露華僑の楊明斎を通訳として引き連れ、まず北京に行き、李大釗と会見した。李大釗の手配のもとで張国燾ら北京在住の知識人たちと座談の場をもった。その後、李大釗の紹介で上海に行き陳独秀に会った。さらに陳望道、戴季陶、沈玄盧、李漢俊、張東蓀、上海『民国日報』副刊の主編邵力子、商務印書館の沈雁冰、陳公培、兪秀松、施存統、劉大白、沈仲九、丁宝林などと懇談の場を持ったとされる。その場所は、上海フランス租界の環龍路老漁陽里二号の陳独秀の自宅か白爾路三益里十七号の『星期評論』社であった。ヴォイチンスキーは北京と上海で十月革命後のロシアの状況とソビエトロシアの対中政策、共産国際や国際共産主義運動の状況と経験を説明した。また中国における労働者階級の状況やマルクス主義思想の中国での伝播の状況から中国において共産党結党の条件が整っているかを確認し、陳独秀と李大釗に必要な援助を与えることにした。ヴォイチンスキーが上海にやってきてすぐに『星期評論』はソヴィエト・ロシアのカラハン宣言の全文と長編の社論を発表した。ヴォイチンスキーから陳独秀らに対して直接の説明があったものとみられる。戴季陶は「俄国労農政府通告的真義」（『星期評論』第四十五号、一九二〇年四月十一日）の中で「確かに人類有史以来空前の美挙である。いかなる民族いかなる国家も歴史上これまでこのような偉大な事業はなかった。このように高潔で高尚な道徳はなかった。[45]」と述べ、ロシア革命の精神を称賛し、被圧迫民族が侵略者たちに一緒に立ち上がっていくよう呼びかけた。カラハン宣言とはロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国が、一九一九年七月二五日付で外務人民委員代理のレフ・ミハイロビッチ・カラハン（Lev Mikhailovich Karakhan）の名で出した対中不平等条約を撤廃する「中国人民および中国の南北両政府に対する声明」（第一次カラハン宣言）のことである。この「声明」では、ロシア帝国の獲得していた領土、中東鉄道、鉱山採掘権、林産資源の利権の無償返還、義和団賠償金の放棄、治外法権の撤廃などがうたわれていた。戴季陶は『星期評論』（第十五号、一九一九年九月一四日）に「俄国両個政府的対華政策」を発表し、断片的な情報に過ぎず、真相をつかめないと留保をつけるものの、帝政ロシア時代の不平等な秘密条約は破棄されるだろうと紹介し（『大阪毎日新聞』一九一九年九月一日の記事

を引用)、「ロシアの対外政策は革命後、完全に変わった。[46]」と期待をこめて論評を加えている。イルクーツク・ソヴィエト発の電報として正式に北京政府外交部に届いたのは一九二〇年三月二六日のことである。中国の新聞には三月中からその内容が断片的に報道されており、四月には全文が報道された。中国での利権返還をうたっていたため、この宣言はヴェルサイユ講話条約の結果に落胆していた中国の知識人に熱狂的に受け入れられた。カラハン宣言は、ロシア革命の実態があまり伝わっていない状況下で、ロシア革命の精神そのものであると受け取られ、中国の知識人たちの親ロシア化に拍車がかかった。陳独秀率いる『新青年』は一九二〇年五月号(メーデー特集号)で、労働組合、商工会、学生団体、雑誌、新聞の宣言に対する熱狂的な論評を集めて掲載した。しかし、カラハン宣言はその後、中国に譲歩したとみられる部分が次々に削除され、中ソ外交の火種を残した。

一九二〇年四月の会談後、ヴォイチンスキーの援助のもと陳独秀は一九二〇年五月に上海でマルクス主義研究会を結成した。正式に参加したのは、陳独秀、李漢俊、沈玄盧、陳望道、兪秀松、施存統等で、大半は『星期評論』の同人である。研究会において陳独秀と施存統の間で中国共産党建党問題の一致した意見を有していた。一九二〇年六月には、陳独秀は、李漢俊、兪秀松、施存統、陳公培らと協議し、共産党組織の結成を決定し、暫定的に党名を社会共産党と決め、綱領を定めた。党の綱領は十ヵ条あり、その中には労工専政、生産合作などを手段にした社会革命を目的にしたものも含まれる。その後、「社会党」にするか「共産党」にするか、命名問題が生じ、陳独秀は李大釗に意見を求め、李大釗は「共産党」がよいと主張したので、陳独秀はそれに従って共産党とした、という。かくして陳独秀のリーダーシップのもと上海の共産党早期組織(中共臨時中央とも言われる)[47]は陳独秀、李漢俊、兪秀松、施存統、陳公培の五人らを中心にして結成された。このうち陳独秀、陳公培以外は『星期評論』の同人である(『星期評論』は六月に停刊を命じられる)。この共産党早期組織は一九二〇年八月に上海フランス租界の老漁陽里二号の『新青年』編集部で正式に成立した。この時「中国共産党」を名乗った。これが中国で最初の共産党組織であり、そのメンバーはマルクス主義研究会を中心にして陳独秀が書記を務めた。集ったのは、陳独秀、李漢俊、兪秀松、施存統、

陳公培、陳望道、沈玄盧、楊明斎、施存統（後に施復亮）、李達、邵力子、沈雁、林祖涵、李啓漢、袁振英、李中、沈沢民、周仏海等である。一九二〇年十二月に陳独秀が広州に赴くと、[48] 李漢俊と李達が前後して書記を代理した。

陳独秀のマルクス主義受容は、一九一八年にはソヴィエト・ロシア労農政権を称賛する文章を『新青年』に発表していた李大釗に比べ遅い。胡適の証言によると陳独秀のマルクス主義受容は、北京での獄中体験が大きく影響している。[49] 陳独秀は「過激派と世界平和」を『新青年』（第七巻第一号、一九一九年十二月）に発表し、過激派［日本におけるボルシェヴィキの訳語］を好意的に紹介した。その後、上海への南下を機に陳独秀はマルクス主義に急接近する。『新青年』は一九二〇年五月に「メーデー記念号」を発行した。陳独秀は、陳望道、李漢俊、李達、沈雁冰らを『新青年』編集部に招いた。一九二〇年九月に、『新青年』第八巻第一号が新たな装いで発行された。同号に陳独秀は「談政治」や「対於時局的意見」を発表した。『新青年』は『ソヴィエト・ロシア』［ロシア革命以降の状況を紹介したロシア語の雑誌］の漢訳本になったと言われた。一九二一年七月に中国共産党が成立以降は、『新青年』は正式に中共中央の機関誌となった。鄭超麟の回想によると陳独秀は五四運動の戦友胡適、銭玄同、劉復、魯迅、周作人らと袂を分かって社会主義の側にやってきた。社会主義の方面の協力者には周仏海、李達、李漢俊、施存統らがいたが、彼らは学校を出たばかりの学生で、河上肇や山川均から学んだカウツキー流のマルクス主義者だった。しかし、一方には、老国民党員である戴季陶、沈玄盧、邵力子らもいた。共産党が成立するとこれら日本留学組の学生はみな参加したが、老国民党組はつかず離れずというところだった。ほどなく陳独秀はこれら二組とも手を切り、実際工作を担う同志、張国燾指導下の人たち、それに第三インターナショナルが派遣してきた外国人ら中国人らと協力した、と。[50] 鄭超麟の指摘で注目すべきは、中国共産党成立は日本留学組の参加によるものであること、また日本留学組はカウツキー流の理論であると言っていることである。「カウツキー流のマルクス主義」とは、マルクス主義の解説者としてのカウツキーであり、マルクス主義正統派を自任しロシアのボルシェビキ革命に対して厳しい批判をしたカウツキーではない。要するに中国でも好評を博した『資本論解説』の高畠素之や遠藤無水らの仕事から連想されるものであろ

う。高畠素之や遠藤無水らは、河上肇、堺利彦や山川均らとともに日本におけるマルクス主義経済学研究の最先端におり、李漢俊らはそれを利用したのである。

おわりに

李漢俊といえば、一九二一年六月の芥川龍之介との会見が想起される。一九二〇年夏には中国共産党が成立していたとすれば、芥川が対面したのは中国共産党書記代理の李漢俊ということになる。章炳麟、鄭孝胥、辜鴻銘との面談は通訳（大阪毎日新聞社村田孜郎など）を介してであった。芥川が李漢俊との面談に感銘を受けたのは、日本語による対話であったことが大きい。芥川が書き記した李漢俊の肉声は以下の通りである。「現代の支那を如何にすべきか？この問題を解決するものは、共和にあらず復辟にあらず、這般の政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を証し、現在亦之を証す。然らば吾人の努力すべきは、社会革命の一途あるのみ」「社会革命を齎（もたら）さんとせば、プロパガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり。且、智識に飢えつつあり。然れどもこの飢を充すべき書籍雑誌に乏しきを如何。予は君に断言す。刻下の急務は著述にあり」（「上海遊記」）と。中国の社会問題や社会革命への言及は、李漢俊のマルクス主義の立場を示している。プロパガンダはその後実行に移された。『新青年』を北京大学教授たちの同人雑誌から党の公開刊行物へと変え、続けて労働大衆の刊行物として『労動界』を刊行し、党の機関誌として半公開の『共産党』（月刊）を創刊した。新青年叢書を発行し、印刷所を整備し『共産党宣言』等のマルクス主義の中国語訳を刊行した。

本稿で述べたように、李漢俊は、はじめて中国で無産階級政党と共産主義運動を構想した人物であり、ギルド社会主義を批判し、弁証法的マルクス主義唯物史観を中国に紹介した人物である。李漢俊は建党時期に「合法的マルクス主義者」として批判され、中共を離脱した。蔡和森、陳潭秋、張国燾は詳細な回想を残している。蔡和森は『中国共

産党的発展（提綱）』（一九二六年）で李漢俊がマルクス主義から逸脱した罪状を九条にわたって詳細に述べている。李漢俊は、一九二二年に武漢に戻り、教育と労働運動に従事した。マルクス主義研究を深め、「唯物史観不是什麼」（一九二二年一月）ではエンゲルス『空想から科学へ』に対して中国ではじめて全面的な解説を行い、マルクス主義的な弁証法と唯物論を詳しく説明している。一九二三年に京漢鉄路の大ストライキに参加した。中国共産党第三回党大会の中央委員に選ばれたが、一九二四年に自ら脱党し、中共中央は正式に除名した。北伐軍が武漢を解放した後、国共合作した湖北省政府委員や教育庁長などを歴任した。一九二七年一二月一七日に桂系軍閥によって殺害された。紙幅の関係により本稿で扱ったのは一九一九～二〇年の李漢俊に限られ、『星期評論』を手がかりに李漢俊の周辺にまつわる思想状況を整理し、そのことによって李漢俊の思想内容を浮き上がらせるという手法をとった。一九二一年以降の李漢俊については他日を期したい。

注

（1）譚璐美『中国共産党を作った十三人』新潮新書、二〇一〇年、一六頁。

（2）李漢俊「我的考試〝畢業〟観」中共湖北省潜江市委党史研究室・中共一大会址紀念館編『李漢俊文集』中共党史出版社、二〇一三年、一二七頁。

（3）李漢俊「跑到内地才睜開了眼睛麼？」『新青年』第九巻第一号、一九二一年五月一日『李漢俊文集』二一一頁。

（4）「星期評論半年来的努力」『星期評論』第二十六号、一九一九年十一月三十日。

（5）本社同人「星期評論半年来的努力」『星期評論』第二十六号、一九一九年十一月三〇日。

（6）玄盧「発刊詞」『星期評論』第一号、一九一九年六月一日。

（7）戴季陶「学潮与革命」『星期評論』第三十九号、一九二〇年二月二九日、張開沅主編、唐文権・桑兵編『戴季陶集（一九〇九～一九二〇）』華中師範大学出版社、一九九〇年、一一四二頁。

（8）「星期評論」『五四時期期刊介紹』第一集（上）、三聯書店、一九七九年、一六二頁。

(9) 鄭大華『民国思想史論』続集、社会科学文献出版社、二〇一〇年、一一二頁。
(10) 周仏海「社会主義的性質」『解放与改造』第二巻第十号、一九二〇年十月。
(11) 楊奎松他『海市蜃楼与大漠緑洲――中国近代社会主義思潮研究』上海人民出版社、一九九一年、一九二頁。
(12) 沈玄盧は『星期評論』に「介紹〝工読互助団〟」(第二十九号、一九一九年十二月二十一日)等を発表し、工読互助を唱えた([美]蕭邦奇『血路――革命中国中的沈定一(玄盧)伝奇』江蘇人民出版社、二〇一〇年)。
(13) 鄧亦武・魏少偉「『星期評論』与馬克思主義在中国的伝播」『湖南工程学院学報』二〇一一年第一期。
(14) 王守常・張翼星・陳岸瑛『馬克思主義哲学在中国』首都師範大学出版社、二〇〇二年、三一頁。
(15) 江田憲治『五四時期の上海労働運動』(京都大学人文科学研究所共同研究報告)同朋舎、一九九二年、七〇頁。
(16) 楊宏雨「『星期評論』対馬克思恩格斯及其学説的介紹」『学術界』二〇一九年第六期、一四一頁。
(17) 一九一二〜四九年に中国語訳された日本書の著者別統計によると、1河上肇、2林鶴一、3山川均、4田中義一、5飯河道雄、6厨川白村、7高畠素之、8菊池寛、9武者小路実篤、10伊藤向賢、11小泉八雲となっており、社会主義者でありマルクス経済学の紹介者である河上肇(出版点数三六点)、山川均(二八点)、高畠素之(二一点)がそれぞれ一位、三位、七位に入っている。(田雁(小野寺史郎他訳)『近代中国の日本書翻訳出版史』東京大学出版会、二〇二〇年、九三頁)。中国での日本のマルクス主義関係出版物の需要の多さが分かる。
(18) 戴季陶「世界的時代精神与民族的適応」『星期評論』第十七号、一九一九年九月一八日、『戴季陶集』一〇二三頁。
(19) 楊宏雨「『星期評論』対馬克思恩格斯及其学説的介紹」『学術界』二〇一九年第六期、一四三頁。しかし、堺利彦「マルクス主義の分化」なる論説は未発見である。
(20) 戴季陶「関於労動問題的雑感」『星期評論』一九二〇年五月一日。
(21) 戴季陶「文化運動与労動運動」『星期評論』一九二〇年五月一日。
(22) ゲアリ・P・スティーソン(時永淑他訳)『カール・カウツキー』法政大学出版会、一九九〇年、一頁。
(23) 田中真人『高畠素之――日本の国家社会主義』現代評論社、一九七八年、八六頁。
(24) 山田司海「故人のプロフェル」茂木実臣編『高畠素之先生の思想と人物』一九三〇年、津久井書店、一三九頁。
(25) 戴季陶「三民主義」『解放』第二巻第二号、大鐙閣、一九〇二年二月、戴季陶「反響」『解放』一九一二年一二月。張玉萍

『戴季陶と近代日本』法政大学出版局、二〇一一年、一二九頁と石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、二〇〇一年、三五四頁に言及がある。

(26) 張玉萍『戴季陶と近代日本』法政大学出版局、二〇一一年、一二八頁。田子渝『馬克思主義在中国初期伝播史（一九一八～一九二二）』学習出版社、二〇一一年、一四一頁も追認する。

(27) 『批評』は大正八年三月一日から翌九月一二月一日まで計二十二号が発行された。室伏高信、尾崎士郎らを中心にデモクラシーの立場を旗幟鮮明にしながら、各種社会主義理論についても紹介を行った（中村勝範「『批評』総目次と解説」『法学研究』慶應義塾大学法学研究会、第三十五巻第一号、一九六二年）。

(28) 楊之華「楊之華的回憶」『〝一大〟前後（二）――中国共産党第一次代表大会前後資料選編』人民出版社、一九八〇年、二五頁。

(29) 李漢俊「怎麼様進化」『星期評論』第十一号、一九一九年八月十七日、『李漢俊文集』四～五頁。

(30) 李漢俊「改造要全部改造――一封答朋友的信」『建設』第一巻第六号、一九二〇年一月。

(31) 田子渝『馬克思主義在中国初期伝播史（一九一八～一九二二）』学習出版社、一九一二年、一九頁。

(32) 李丹陽「李漢俊与中国共産主義運動起源」『史学月刊』二〇一二年第七期、五八頁。

(33) 小野容照『朝鮮独立運動と東アジア』思文閣出版、二〇一三年、一八〇頁。

(34) 李漢俊「強盗階級底成立」『星期評論』一九二〇年五月一日、『李漢俊集』一三〇頁。

(35) 半年後に張東蓀「自内地旅行而得之又一教訓」（一九二〇年十一月六日）が発表され、大きな反響があり、陳独秀、李達、陳望道、李大釗、施存統、周仏海、許新凱等が論戦に参加した。

(36) 森川裕貫「第五章　社会主義とどう向き合うのか――中国社会主義論戦と張東蓀」『政論家の矜持――中華民国時期における章士釗と張東蓀の政治思想』勁草書房、二〇一五年。

(37) 李漢俊「渾朴的社会主義者底特別的労動意見」『星期評論』第五十号、一九二〇年五月十六日、『李漢俊文集』一三九頁。

(38) 李漢俊は「『馬格斯資本論入門』序」（一九二〇年九月、社会主義研究社）『李漢俊文集』一九四～一九五頁。

(39) 『新青年』（第九巻第五号、一九二一年九月）の「人民出版社通告」の「馬克思全書」に李定訳『価値価格与利潤』がある（未刊行）。李定は李漢俊の別名（李丹陽「関於李漢俊馬克思主義著作翻訳情況的探討」中共〝一大〟会址紀念館他編『上海革

命史資料与研究』第八輯、上海古籍出版社、二〇〇八年、一三六頁）。

(40) 堀切利高「遠藤無水の行跡」『初期社会主義研究』第十一号、初期社会主義研究会、一九九八年、二三三頁。しかし、遠藤無水は後に高畠素之と思想的に疎遠になっていった（都築久義『若き日の尾崎士郎』笠間書房、一九八〇年の第二部「売文社の仲間たち」第四章「遠藤友四郎」二五八頁）。

(41) 中共中央党史研究室著『中国共産党歴史』第一巻（一九二一～一九四九）上冊、中共党史出版社、二〇〇二年。高橋伸夫『中国共産党の歴史』慶應義塾大学出版会、二〇二一年、等。

(42) ヴォイチンスキーの来華に先立つ一九二〇年二月に上海の陳独秀と北京の李大釗が相談して中国共産党の創立を構想したとする「南陳北李、相約建党」は、高一涵の一九二七年の回想に依拠した説だが、高一涵の回想の信憑性に疑問符がつけられている。

(43) 佐藤公彦『陳独秀――その思想と生涯』集広舎、二〇一九年、一四九頁。

(44) 張国燾『我的回憶』第一冊、現代史料出版社、一九八〇年、八二頁。

(45) 戴季陶「俄国労農政府通告的真義」『星期評論』第四十五号、一九二〇年四月十一日、『戴季陶集』一一九〇頁。

(46) 戴季陶「俄国両個政府的対華政策」『星期評論』第十五号、一九一九年九月一四日、『戴季陶集』一〇一六頁。

(47) 郭華倫（藤井高美他訳）『中国共産党史論』第一巻、春秋社、一九八八年、九頁。

(48) 広州での陳独秀については、村田雄二郎「陳独秀在広州」『中国研究月報』四九六号、一九八九年を参照。

(49) 唐宝林『陳独秀全伝』香港中文大学出版社、二〇一一年、一三三頁。

(50) 鄭超麟（長堀祐造他訳）『初期中国共産党群像1――トロツキスト鄭超麟回憶録』平凡社、二〇〇三年（原著は一九八六年）、二三九頁。